

パリの夏目漱石

鈴木正昭

- 〈目次〉 §1 留学決定
§2 出発
§3 時代背景
§4 欧州上陸
§5 パリ到着
§6 万国博覧会
§7 エッフェル塔
§8 繁華と墮落

§ 1 留学決定

熊本の第五高等学校教授夏目金之助に「英語研究」のため文部省から英国留学の命令が下ったのは明治33年（1900年）6月のことである。周知のごとく漱石は東京帝国大学在学中から東京専門学校（現早稲田大学）で時間講師を務めたのを手始めに、卒業後は東京高等師範学校（現筑波大学）の講師を歴任していた。当時高師は教育関係のポストとしては東京帝国大学、第一高等学校に次ぐ名誉ある職場とされていた。彼がその地位を振り捨てるようにして遠隔の地である四国の松山の中学校に赴いたのは、その地がたとえ親友正岡子規の郷里であったにせよ、また校長よりも高給という好条件を提示されたからにせよ、どこか不自然な印象は拭えない。その理由については古くからさまざまに詮索されてきたけれども、今日に至るまで定説は存在しないようであるし、また「真相」など永遠の謎であろう。自分の行動の原因をすべて説明することなど、本人でも不可能なことであるし、敢えてすればそれは作り話ということになる。

明治政府は当初から多くの留学生を欧米先進国に派遣して、進んだ文明の移植を積極的に推進してきたのであるが、当初は自然科学、法律、軍事といった分野の留学生の派遣がその主流を占めていた。当然のことながら明治政府が目標とした「富国強兵」に必要な学問・技術が優先されたということもあった。ということは芸術関係、教育関係の留学生を欧米に派遣する資金を捻出する余裕はなかったということでもあった。ところが明治33年になって、高校教員の海外派遣が制度化され、漱石はその第1回の留学生に選ばれたわけである。そのための費用には日清戦争の勝利によって得られた賠償金の一部が充てられたといわれる。こうして欧米に派遣した留学生の帰国を待って、政府は高給取のお雇い外国人を解雇し、日本人をその地位につけたのである。

漱石は後に『文学論』の序文において、自ら留学を志願したわけではない

ようなことを述べているけれども、これは彼一流の韜晦である可能性がある。出口保夫氏は漱石が選ばれたのは岳父中根重一の影響力があつたからではないかと推論されているほどである。また『文学論』の序文には「英国で過ごした二年間は生涯でもっとも不愉快な二年間だつた⁽¹⁾」という有名な言葉が見受けられるが、これについても近親者は相当異なつた印象を受けたようである。また漱石自身も『道草』には自分の表面的な外国嫌悪の下には誇りが隠されていたのに帰国当初はそのことに無自覚だつた、という意味の記述⁽³⁾を残している。『文学論』と『道草』には10年近い隔りがあるから、漱石自身の認識にも相応の変化があることは当然であるが、家族は彼が気づかなかつた誇りの存在を敏感にかぎつけていたものと思われる。

留学に関して彼にためらいがあつたとすれば、それは彼を英国に派遣する目的が「英語」研究であり、「英文学」研究でなかつたという点であることもよく知られている。漱石は上田万年学務局長を文部省に訪ね、あまり窮屈に考える必要はない、という言葉を取りつけた。従つて、出発時の漱石にはこの問題は既に解決済みだつたと思われる。

§ 2 出発

彼がドイツ汽船プロイセン号で横浜を出発したのは明治33年9月8日のことである。港では妻の鏡子のほか岳父中根重一および熊本以来の愛弟子の寺田寅彦が見送つた。友人としては狩野亭吉が顔を出した。狩野には上海から礼状を投函した。狩野は漱石より3歳年長の友人で秋田県大館の出身。明治21年に東京帝国大学の哲学科を卒業後、24年には同数学科を卒業した。第四高等学校、第五高等学校に勤務し、明治31年には第一高等学校の校長に転出。後に京都帝国大学文科大学の創設に参画し、内藤湖南、西田幾多郎らを招聘したことで知られる。1942年（昭和17年）に亡くなつた。寺田に対しては直前に「秋風の一人をふくや海の上⁽⁴⁾」という今日でも漱石の代表的な句の一つと見なされる作品を添えた手紙を送つた。漱石は寺田に見送りに

及ばないと伝えていたのであるが、それにもかかわらず寺田は横浜まで足を運んだのである。

留学の同行者には文科大学から国文学の芳賀矢一、農科大学の稲垣乙丙、軍医の戸塚機知、第一高等学校教授でドイツ文学者の藤代禎輔らがいた。芳賀は福井県出身の国文学者。ドイツで文献学を習得して帰朝、東大教授になり近代国文学研究の基礎を築いた。藤代は漱石と同年の生まれで東大の独文科を卒業し、帰国後は新設の京都帝国大学教授になった。偶然の一致であるが、芳賀と藤代は漱石よりも10年近く長生きをして1927年（昭和2年）に亡くなっている。彼らとともにヨーロッパに派遣される予定だった樗牛高山林太郎は直前に結核に罹り、留学を諦めざるをえなくなった。若年にして世に出、漱石のライヴァル意識を大いに刺激した高山は1902年（明治35年）12月23日に亡くなった。その頃英国留学を終えた漱石を乗せた船はインド洋を日本に向かっていった。

出発に先立ち彼は7月下旬に熊本を引き払い、妻と長女の筆子を妻の父中根重一のもとに預けた。留守宅の妻子には月25円の手当てが支給された。ただしこの金額ではいかに当時といえども安楽な生活を保証するには程遠かった。そしてこの中から建艦費として1割が天引きされたのであるから手取りは22円そこそこだった。父親の中根重一は内閣書記官長を勤めたこともある高級官僚ではあったが、政変のため辞職を余儀なくされ、安定した収入を失った。その上彼は相場に手を出して失敗し、娘や孫の援助をすることができなかった。熊本では100円という当時の給与水準では相当な高給取だった家庭を、家賃が不要であるとはいえ数分の一の金で賄うことの困難さは容易に想像できよう。参考までにいくつかの数字を挙げると、当時の大卒の銀行員の初任給が35円、高等文官試験に合格した高等官の初任給が50円だった。また小学校教員や警察官の初任給は大体10円前後だった⁽⁵⁾。現在と異なり、学歴、職種により給与格差が極めて大きな時代であったから、1カ月22円で暮らしていた家庭は少なからず存在したはずである。しかし鏡子は何といてもお嬢様育ちで贅沢な生活に慣れていたので、この程度の金額で切り

盛りすることは極めて困難だったのである。

9月8日に横浜を出港したプロイセン号は神戸に停泊し、10日には長崎に到着した。神戸では諏訪山温泉に行き、日本料理を食べ、浴衣を着て寛いだ。慣れない船旅でひどい船酔いに悩まされた様子が中根への書簡によって知られる。⁽⁶⁾ 13日には上海から、19日には香港から狩野や高浜虚子に手紙を送った。虚子へのはがきでも下痢と船酔いに悩まされていたことがわかる。上海でも香港でも彼は日本旅館に泊まり日本食を食べている。27日付の鏡子宛ての手紙では上海や香港の繁栄が横浜や神戸の比ではないこと、とりわけ香港の夜景の美しさには絶賛をおくっている。また彼は恐らくここで初めてケーブルカーに乗ったのであろう。「山ノ絶頂迄鉄道車ノ便ヲ仮リテ六七十度ノ峻坂ヲ上リテ四方ヲ見渡セバ其景色ノ佳ナルコト実ニ愉快ニ候」と子供のような興奮を示している。シンガポールでも日本の旅館に立ち寄って食事をした。ここでは熱帯植物の美しさ感動すると同時に多くの日本人「醜業婦」の存在に眉を顰めている。⁽⁸⁾ いわゆる「からゆきさん」である。ペナン、コロンボを経て横浜を出て1カ月後の10月8日にはアデンに到着した。

§ 3 時代背景

ところでこの1900年（明治33年）というのは19世紀最後の年としてのみ記憶されるべき年ではなく、世界史的にも極めて重大な年だった。中国では義和団事件が勃発し、アフリカではいわゆるボーア戦争が戦われていた。帝国主義はその頂点に達しようとしていた。我が国にとって最大の危機だった日露戦争は3年後に迫っていたし、欧州での大戦も10数年後のことだった。

義和団というのは山東省に住む白蓮教の一派であるが、彼らは前年から排外運動を行っていて、1900年5月には北京郊外まで迫った。脅威を感じた北京駐在の外交官は本国に派兵を依頼した。8月には日本を含む8カ国は連合軍を編成して義和団および清国軍を制圧した。ところが満州ではロシア軍が快進撃を続け、10月には南満州のほぼ全域をその手中に収めた。

ロシアのこうした動きにもっとも脅威を覚えたのは我が国と英国だった。利害を共にする日本と英国はその後日英同盟を結んで協力関係を推し進めることになった。しかしこの時点では英国は大きな勢力をこの地域に投入することが出来なかった。なぜなら英国は義和団事件とほぼ平行して、アフリカ大陸でボーア戦争を戦っていたからである。

英国のアフリカ支配においては南のオランダ人の開拓移民の国、トランスバル共和国とオレンジ自由国が大陸縦断政策にとって最後に残された障害だった。そして障害は取り除かれなければならなかったのである。1890年代に入ると英国のこれらの国々にたいする挑発が盛んになり、1899年の10月にはついに戦争になった。当初はボーア人が優勢であったが、1900年の2月には英国軍の勝利がほぼ確実なものとなった。しかしそれからなお、およそ2年間英国はゲリラ戦に悩まされ続けることになった。

中国大陸での戦闘行為はほぼ終結していたとはいえ、戦争の報を聞きながら留学に出発した漱石は、英国到着時にもボーア戦争の義勇兵の凱旋を歓迎する人々の波に巻き込まれた。留学から日本に帰ってしばらくすると日露戦争が始まった。そして1917年（大正5年）第1次大戦の最中に亡くなった。そればかりではない。彼が生まれた1868年（慶応3年）は、260年以上続いた徳川幕府が西南雄藩の連合軍の前に政権を投げ出した年である。

直接戦場に出ることはなかったとはいえ、彼の生涯は戦争とともに始まり、壮年期には義和団事件、ボーア戦争、日清戦争、日露戦争を経験し、第1次大戦の最中、戦争とともに幕を閉じたのである。世界史的な大事件を逃れて欧州に帰国する人々が漱石たちの乗ったプロイセン号にも乗り込んできた。しかし漱石の書簡や日記にはこの事変や、それを逃れて帰国する人々に関する記述は見受けられない。

§ 4 欧州上陸

アデンでは黒人の縮れ毛を見て「ロシヤナ仏ノ頭ノ本家ハ茲ニアリ⁽⁹⁾」と思

ったりした。バベルマンデブ海峡を通過して、10日に紅海に入ると急激に暑さを意識するようになった。これは翌11日も続いた。しかし12日になるとようやく涼しくなった。右岸にはシナイ山が見えた。13日朝スエズ着。ここでロンドンタイムズほか2、3種の雑誌を購入し、内閣の交代を知った。14日にはポートサイドに入港。ここで乗客の多くは白衣から秋の装いへと変身した。地中海を4日ほど航海してナポリに停泊。ここには欧州での留学を終えて帰朝する松本亦太郎らを乗せたケーニッヒ・アルバート号も停泊していたが、プロイセン号の乗客はなぜか上陸を許可されなかったため久しぶりの再会はかなえられなかった。松本は漱石よりわずかばかり年長の心理学者・美学者で京都帝国大学、東京帝国大学の教授を勤め1943年（昭和18年）に亡くなった。この時彼はドイツ留学からの帰途にあったのである。

18日は上陸してナポリ見物をした。大聖堂を二つ、博物館、Arcade Royal Palaceを見物した。大聖堂については「寺院ハ頗ル莊嚴ニテ立派ナル」、博物館については「有名ナル大理石ノ彫刻無数陳列セリ且Pompeyノ発掘物非常ニ多シ」、ロイヤルパレスについては「頗ル美ナリ」とその印象を日記に書き記した。教会の一つはサン・フランチェスコ・パオラ教会であろうか。この教会は1846年に完成した新古典様式の教会で、古代ギリシャやローマの様式を採用している。あと一つの教会はどこであろうか。ナポリには他にジェズ・ヌオーヴォ教会、サンタ・キアラ教会があるが、漱石は一切固有名詞を挙げていないので特定は不可能である。博物館というのは国立考古学博物館のことであると思われる。ここはとりわけポンペイから発掘された遺物の収集で名高い。その他ファルネーゼ家所蔵のギリシャ・ローマの美術品も広く知られている。王宮は17世紀初期の建設で歴代のナポリ国王の居城として使用された。たびたび改築を重ねてきたが、ファサードは創建当時のままであると言われている。

ナポリではまだ東洋人が珍しかったのであろう、彼は無遠慮な視線に大いに悩まされた。「馬車ニテ見物致候が半分ハ見物サセニ歩行ク様ナモノニ候」と妻への書簡で報告している。

19日午後2時頃ジェノバに到着。「丘陵ヲ負ヒテ造ラレタル立派ナル市街ナリ」というのがこの町の第一印象だった。上陸は夕方になった。およそ40日の船旅はここで終わりを告げた。その夜はグランドホテルに宿泊した。「宏壮ナル者ナリ生レテ始メテ斯様ナル家ニ宿セリ」⁽¹³⁾とあるが、絵や写真でしか知らなかった西洋に始めて触れた驚きと興奮が感じられる。前夜は船中泊だったから、西洋の家に泊まるのは初めての経験だったのである。夕食後「案内ヲ頼ミテ市中ヲ散歩」⁽¹⁴⁾した。長旅の疲れをものともせず外出したのはやはり気持ちが高ぶっていたからであろう。この町には王宮の他いくつかの宮殿やサン・ロレンツォ大聖堂、コロンブスの生家などがあるが、漱石の日記や書簡は固有名詞を一つも挙げていない。いずれにせよ、夕食後のことでもあり、教会はともかく博物館や美術館には入場せず、外観だけの見物だったのではないかと思われる。

20日は朝8時半の列車でジェノバを出発した。ホテルから駅までは馬車に乗った。当時はまだ馬車がタクシーの役割を果たしていた時代だった。自動車は既に発明はされていたけれども、まだ一部の金持ちや好事家の所有物に過ぎず、公共交通の手段となるには高価すぎる乗り物だったのである。20世紀は自動車の時代といわれることもあるけれども、初頭はまだまだ馬車の時代だったのである。駅には無事に着いたものの、構内でうろうろして乗り場がわからず途方に暮れたり、座席が確保できなくてトマス・クックの支店の従業員を煩わせて臨時列車に席を確保してもらう話など、微笑ましい話題には事欠かない。こうしてやっと乗り込んだ列車はトリノで乗り換えなければならなかった。駅前のホテルで昼食をとり午後4時半の列車に乗るが、これまたほとんどの座席がすでに乗客で占められていた。漱石を含む一団は5人であったが、それぞれ離れ離れに座席を確保せざるをえなかった。バルドネッキアを出ると列車は長いトンネルに入った。全長12キロのトンネルを通過してモン・スニ峠を抜けると列車は間もなくモダヌに到着する。国境のトンネルを過ぎてフランスに入ったわけである。

このトンネル工事が始まったのは1857年のことである。日本はまだ江戸

時代だったし、漱石が生まれる10年以上も前のことだった。工事の完成には14年の歳月が必要だった。しかしそれでも当初の予定よりは遥かに早い完成だった。⁰⁵1871年の完成であるから、漱石がこのトンネルを通過したのはそれからおよそ30年後のことである。工事期間の短縮が可能になったのは技術革新のおかげだった。次から次へと新しい技術が開発され、実用化される時代だった。モダンでフランス入国のための査証や持ち物のチェックが行われたのであるが、ここでも漱石は小さな失敗をした。列車で国境を越える場合は普通は座席に座ったまま検査を受けられるのであるが、彼は下車しなければならないものと思い込んでいたために、座席を離れてしまった。誤りに気づいて、慌てて戻った時には座席は既に他の乗客に占拠06されていて、再び座席の確保に四苦八苦しなけりばならなかつた。

§ 5 パリ到着

パリ到着は10月21日の朝8時頃である。この日は日曜日だった。ここで漱石はパリと言わないで、「パリス」と英語読みで発音しているが、当時はこれが一般的だったのであろうか。漱石のパリ滞在はわずか1週間であり、彼は次の日曜日10月28日にはパリを後にして最終目的地ロンドンへと旅立つことになった。

パリに着いたものの、彼らはまたここで途方に暮れることになった。漱石は英語を別にすると、フランス語は読解はともかく、会話はほとんどできなかったと思われる。まして芳賀は国文学者であり、英語やこれから留学する国の言語（ドイツ語）はある程度解したであろうが、フランス語の会話力はなかったものと思われる。ただ独文学者の藤代が船内で泥縄式に覚えた知識を駆使して警察官らしき人物に話しかけたおかげで、彼らは馬車を雇い正木氏の宿所までたどり着くことができた。

正木というのは漱石たちより数年年長の文部官僚で、当時は美術課長として渡仏中だった。彼のフランス出張は折りから開催中だったパリ万博のため

だった。彼は帰国後は東京美術学校（現東京芸術大学）の校長を務め、昭和15年に亡くなった。正木と万博の関係は帰国後も続いた。1904年（明治37年）米国のセント・ルイスで春から開催された万博に彼は同僚たちとともに審査員として参加したからである。この博覧会を機会に開催された万国学芸会議には日本からは北里柴三郎、穂積陳重、箕作佳吉ら著名な学者が参加した。また当時米国留学中だった永井荷風がこの博覧会をしばしば見物に訪れた。

漱石たち留学生たちが訪問した時、正木は英国出張中であつたため、彼らは渡辺という文部省書記官の世話になることになった。彼らは渡辺と朝食、昼食をとともにした。この際フランス人が同席していた。「仏人ト会食セルハ始メテナリ¹⁷」の言葉が日記に見受けられる。食後駅まで荷物の受け取りに行き、レストランで夕食をとった。ここで彼は英語を話す女性と口を利いた。英語の通じない国で英語を話す人に会つたことがよほど嬉しかったのか「美人アリテ英語ヲ話ス¹⁸」という言葉¹⁸を日記に書き残した。

漱石は当時の知識人の常として中国古典への造詣が深く、中国人にも高い評価を得るほど優れた漢詩を相当数残しているし、東大英文科時代には『方丈記』の英訳により外国人教師に絶賛されるほど見事な英文を書くことが出来た。彼の語学に対する適性が常人をはるかに凌駕していたことは明らかであるが、英語以外のヨーロッパの言語に対する知識は必ずしも十分ではなかつたものと思われる。彼自身も英語以外の欧州語の必要を、とりわけ留学決定後は強く意識したらしく、たとえば高浜虚子に対して「僕も洋行することになるのだつたら、謡なんか稽古せずに仏蘭西語でも習って置いたらよかつた¹⁹」と語っている。さらにフランス到着後10月23日付の鏡子宛て書簡にも「此位ナラ謡ヲヤラズニ仏語ヲ勉強スレバ善カツタト今更不覺ヲ後悔致候²⁰」とほぼ虚子への言葉と同趣旨の言葉を書き送った。

フランス及びその言語に対する漱石の熱意はその後も持続し、英国到着後、狩野、大塚、菅、山川という4人の旧友に宛てた1901年（明治34年）2月9日付の長文の書簡には「僕は順に行けば来年の十月末若くは十一月始ニ帰朝するのだが少シ仏蘭西に行つて居たいどうも仏蘭西語が出来んと不都合だ切角

洋行の序にやって行きたいが四ヶ月か五ヶ月でいゝが留学延期をして仏蘭西に行く事は出来まいか狩野君から上田君に話して貰ひたいそうして一寸返事をよこして貰ひたい」という留学期限の延長を友人たちに依頼するところまで充進していたのである。

大塚保治は美学を専攻し、独・仏・伊に留学後ケーベルの後任として東大教授になった。彼の妻は才色兼備の女流作家であり、漱石の密かな恋人に擬せられたこともある。彼女の死に際して漱石は「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」の一句を手向けたことも広く知られている。菅虎雄はドイツ語専攻、五高、一高の同僚でもあった。山川信次郎は漱石と同じく英文学を専攻し、五高、一高の教授を歴任した。『草枕』や『二百十日』に取り上げられた小天温泉や阿蘇山への旅行を共にした。

しかし、この留学延長運動は実を結ばなかった。同年9月12日付寺田寅彦宛て書簡では「僕は留学期限を一年のばして仏蘭西へ行き度が聞届られそうにもない」と大分弱気になっている。さらに9月22日付鏡子宛て書簡には「先達桜井氏より手紙参り候其前桜井氏宛にて留学延期（仏国へ）の件周旋頼み置候処延期は文部省にて一切聞き届けぬ由につき泣寝入に候」と希望が叶えられなかったことを報告した。桜井氏というのは五高の教頭、校長を歴任した桜井房記のことである。

フランスでは言葉の通じない異国での金の重要性も自覚された。10月22日付の鏡子宛て書簡にはナポリ上陸と市内見物、ジェノバでのホテルの様子、パリまでの汽車の旅の模様を伝えた後、「金ノ力ニ便リテ」夢中でパリまでたどり着いたと述べている。もっとも彼の金銭に関する言及はその後も途絶えることなく、ロンドン滞在中もしばしば繰り返されることになった。そのおかげで今日我々は漱石のロンドンでの暮らしぶりや物価についてかなり正確な知識を入手できるわけである。

大使館の渡辺董之助の世話で素人下宿を紹介された漱石は、1週間をこのノディエ夫人の下宿で過ごすことになった。

10月22日には大使館に安達峰一郎を訪ねたが不在で会えなかった。安達

は当時3等書記官であったが後フランス大使を務めた人物である。次に訪ねた浅井忠もまた不在だった。浅井は言うまでもなく明治を代表する洋画家の一人。当時は東京美術学校の教授で、万国博の臨時博覧会監査官を委嘱されパリ滞在中だった。浅井は漱石よりも一世代上で1856年（安政3年）に江戸に生まれ、1907年（明治40年）に亡くなった。彼は1876年から工部美術学校の開設とともにイタリア人画家フォンタネージについて本格的な西洋画を学んだ。しかしフォンタネージが病気のため帰国すると後任の教師に不満を覚えて退学した。89年には我が国初の洋画団体明治美術会の創立に参加した。98年東京美術学校（現在の東京芸術大学）の教授に迎えられた。浅井はフランス滞在中に水彩画の分野で多くの傑作を残している。彼は漱石よりも一足先に帰国し、帰国後は京都に移って新設の京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）の教授に就任した。門下からは安井曾太郎、梅原龍三郎、津田青楓らが輩出した。彼は正岡子規と親しく、「ホトトギス」創刊当初より表紙や挿し絵を多く描いていた。漱石は親友の子規を介して浅井の知遇を得たのだった。

§ 6 万国博覧会

この日、安達にも浅井にも会えなかった漱石はやむを得ずひとまず宿舎に戻り、午後2時から渡辺の案内で万国博覧会場を訪れた。「規模宏大ニテ二日ヤ三日ニテ容易ニ観尽セルモノニアラズ方角サヘ分ラヌ位ナリ」という驚きの言葉を彼が帰宅後書きつけざるを得なかったほど、東洋の新興国からの訪問者の度肝を抜く仕掛けが数多く用意されていたのである。この驚きの言葉は23日付鏡子宛て書簡にも反復されることになる。「博覧会ヲ見物致候が大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一方向方角サヘ分り兼候（・・・）博覧会ハ十日ヤ十五日ニテモ大勢ヲ知ルガ積ノ山カト存候²⁹」。1日過ぎて2、3日が10日、15日に昇格しているのは時間の経過と共に博覧会から受けた衝撃の大きさが増幅されたからであろうか。

19世紀は万国博が競って先進各国で開催されるようになった世紀である。博覧会自体はフランス革命直後から開催されていたが、それはあくまでも内国博覧会であり、万国博は19世紀の中葉、英国で開催されたものをその嚆矢とするのが適切であると思われる。我が国でも既に明治の初期から内国勸業博覧会はしばしば開催されていた。東京では明治10年、14年、23年に上野で開催された。漱石もこれらのいずれかを見物に訪れたことがあったかもしれない。もちろんこれら国内の博覧会も幕末、明治初頭以来万国博を深く研究した成果を活用して開催にまでこぎつけたことは言うまでもない。

万博の開催は先端技術を誇示することによって国威発揚に大きな役割を果たした。また万博開催準備のための作業や工事は都市空間を再編成し、より便利で快適な空間や交通通信手段を都市住民にもたらした。しかし、万博の開催はもちろん国威発揚だけがその目的だったわけではない。19世紀後半から20世紀前半のおよそ1世紀の間、万博がこれほど盛んだったのは恐らく国民国家の形成と産業革命により飛躍的に上昇した生産力が生み出した大量の製品の販路の追求であるとともに、産業化の進展がもたらしたダイナミックな社会が喚起する好奇心の要求に応えるためでもあっただろう。人々の好奇心を満足させた、いかにも帝国主義時代的な展示物は列強がそれぞれの植民地の物産と共に展示した原住民たちである。彼らは数カ月の間好奇の目にさらされながら、見世物として動物園の動物さながらの生活を余儀なくされたのであった。漱石がこうした原住民たちの居住する区域に足を踏み入れたかどうかは日記や書簡からは確認できない。

漱石が訪れたこの万博は、万博の世紀（19世紀）の最後を飾る博覧会だった。万博の元祖とも言うべき、クリスタル・パレス（水晶宮）で名高いロンドン万国博の入場者は600万人だった。その後万博入場者は回を重ねる毎に増加しつづけ、50年後の1900年にパリで開催された万博には実にロンドンのそれのおよそ8倍の4,810万人の見物客が入場した。さらに70年後の大阪万博の観客総数が6,400万人であることを考えると、これは驚くべき数字であるといわなければならない。こうした入場者数の増加には、万博の性格の

変質も関係しているかもしれない。ドミニック・ルジュンヌも言うように、当初教育的意図が強かった万博もこの頃になると、お祭りのな要素、見世物的な要素が徐々に強くなっていったのである。

この万博を支配した美術様式は一般的にはアール・ヌーボー様式だったといわれている。これに対し鹿島茂氏は支配的な様式はアール・ヌーボーではなく、ホイップ・クリーム様式と呼ばれる装飾過多のネオ・ロココ・スタイルであると主張されている。美術様式の当否を判定するのは本稿の目的ではないが、今日我々が博覧会会場正門の写真を見て感じるのは20世紀に向かう合理的・機能的でシンプルな様式とはまさに正反対の美意識である、という氏の主張には説得力があることを認めなければならない。展示館や建築物には直線ではなく曲線が多用された。鉄骨という新しい素材が従来の美意識にのっとり利用されたのである。あるいは美意識が素材の進化に追い越されたといってもいいであろう。

美意識の点とはともかく万博に備えてパリは大改造を施された。地下鉄が敷設された。パリは地下鉄に関してはヨーロッパの主要都市に相当遅れを取っていたが、これは地下に蒸気鉄道を走らせることによってもたらされるに違いない健康への悪影響が懸念されたからである。当初は我が国の首都高速道路よろしく、空中に線路を敷設するアイデアまであったと言われている。そうこうするうちに地下に電車を走らせることが可能になり、万博をきっかけに地下鉄敷設が決定されたのである。この時敷設されたのはヴァンセンヌとポルト・マイヨー間だった。

今日のオルセー美術館も元来は鉄道の駅として建設されたものである。これも1900年の万博に間に合わせるべく建設された。当時フランスの鉄道は私鉄であったが、オルレアン鉄道の終着駅は都心からやや離れたオーステルリッツにあったものを、万博見物客の便宜を考慮して都心に移したわけである。ところが鉄道の駅をルーブルなど由緒ある建物の近くに作るのは著しく都市の美観を損ねるという意見があったため、周囲の古典的な建築群との調和を図るべく、現在我々が見るような、当時の建築様式からすればやや時代

遅れの建築物が作られたのである。この例に限らずヨーロッパでは鉄道の駅を都心を作ることは美観派の反対があつて不可能な場合が多かつた。その点は丸の内に東京駅を作ってしまった我が国とは大きな相違がある。

パリ万博は今日まで残存し、利用されている建造物を数多く残したが、各種の展覧会に利用されているグラン・パレとプチ・パレと呼ばれる一対の展示場、セヌにかかるとしては最も幅が広く、壮麗なアレクサンドル3世橋も盛大だった1900年万博の余韻を今日に伝えている。

§ 7 エッフェル塔

22日に漱石はエッフェル塔にも登った。このエッフェル塔も万国博に縁の深い記念建造物である。当時の先進工業国はいずれも競つてみずからの国での開催を働きかけたのであるが、とりわけフランスは熱心だった。そして1855年、67年のパリ万博は516万人、1,100万人というおびただしい入場者を国の内外から集めることが出来た。さらに78年の第3回万国博には実に1,510万人が訪れた。とりわけこの第3回の万博が大成功を収めたことは、普仏戦争の敗北により自信を喪失していたフランス人に大きな希望を与えたと言われる。フランス政府はその成功に励まされ、84年になると5年後の89年にフランス革命の100周年記念を兼ねてパリで万博を開催することを決定した。そしてその万博の目玉となる企画が求められた。前回78年の万博の際トロカデロ宮殿（現在のシャイヨ宮）の設計担当者ジュール・ブルデが意見を求められた。彼はアンヴァリッドの広場に高さ365メートルの「太陽の塔」という名の石造りの塔の建造を提案した。しかしこの案は採用されず、代わりに採用されたのがギュスターブ・エッフェルの提案した高さ300メートルの鉄塔だったのである。工事は87年の1月末に開始された。そしておよそ2年後の89年3月30日に完成をみた。ただしまだエレベーターは利用できず、落成式にやって来た各界名士は歩いて塔を登らなければならなかつた。この塔自体が当時の最新の技術の粋を集めたものであったことは言うまでも

ないが、それ以外にも水圧式のエレベーターを5基備えていたり、照明用に電気とガスが使用されたりした。夜間に塔を照明により浮かび上がらせるためにはガスが使用された。夜になると塔の上から下まで2万以上も取り付けられたガスランプに点火された。ライトアップが100年以上前からおこなわれていたのは驚くべきことである。各階の連絡には発明されて間もない電話が導入された。塔の3階まで登るには5フランが必要だったが、これは当時の労働者の日当に値したと言われる。現在の日本円にすると数千円から1万円の間くらいであろうか。今日の我が国で音楽会や芝居の入場料は席にもよるが大体数千円から1万円くらいであるから、決して安くはなかったけれども、特別法外な入場料というわけでもなかった、と言っていいのではないだろうか。万博は5月6日から始まり、当初は11月6日閉会の予定だったが、エッフェル塔の好評に応じて2日間延長され、11月8日に閉会した。半年の会期であるが、百年後の今日でも万博の期間は半年であることは興味深い。その半年間にエッフェル塔に登った人はおよそ200万人だったといわれている。これは当時の生活水準、交通の便などを考慮に入れたら天文学的な数字であるといっても過言ではない。しかし予想されていたことではあるが、翌年には入場者は5分の1の40万人に激減してしまった。97年には20万台、99年には15万台まで落ち込んだ入場者の回復が望まれた。そのためにはエッフェル塔にそれに備えて改装を施さなければならなかった。前回のライトアップはガスによったが今回は電気による照明に置きかえられ、電球の数も5万個に増加した。しかし1900年の万博には観覧車と、覗いて見る活動写真という強敵が現れたため前回のように入場者の一人勝ちは望むべくもなかった。事実、万博での入場者は100万人台で、前回の半数に止まった。そしてその中の一人がわが夏目漱石だったのである。

大観覧車はセーヌ川の南に作られ、1898年から1923年までの四半世紀営業を続けた。これは高さが103メートルもあった。1900年の万博には動く歩道も出現した。この歩道はエッフェル塔と照明灯の間に作られた。2本あって一つは時速4キロに、もう一つは8キロに設定されていた。今日空港や駅

で見られる水平に動くエスカレーターの先駆的存在である。日記や書簡はこれらについて何も語っていないので、漱石が大観覧車に乗ってみたか、動く歩道を利用したか否かを断定することは不可能である。

エッフェル塔はわずか2年あまりでほとんど犠牲者を出すことなく完成された。これもまた特記すべき出来事であると思われる。使用された鉄は7,000トン、総重量9,000トンなどという知識を漱石は持っていただろうか。いずれにせよ彼はエレベーターに乗って頂上まで登り、初めて目にする欧州の大都市のパノラマを心ゆくまで堪能したのだった。鏡子宛ての23日付書簡には「エッフェル塔ノ上ニ登リテ四方ヲ見渡シ申候是ハ三百メートルノ高サニテ人間ヲ箱ニ入レテ綱条ニテツルシ上ゲツルシ下ス仕掛ニ候」と記されている。しかし漱石にとってエレベーターに乗るのは初めての経験ではなかったかもしれない。というのは1890年（明治23年）には早くも浅草の凌雲閣にエレベーターが敷設されていたからである。彼は少なくともエレベーターというものの存在は承知していたであろう。当時から既に世界が一体化に向かい情報以外の物も、その伝播に要する時間的な隔たりは限りなくゼロに近づいていたのである。

§ 8 繁華と墮落

万博見物を終えた漱石は渡辺宅で夕飯を供された後グラン・ブールバールを散策した。ここはパリでも屈指の繁華街であり、銀座通りくらいしかなかった漱石を圧倒するのに十分だった。「其状態ハ夏夜ノ銀座ノ景色ヲ五十倍位立派ニシタル者ナリ」と日記には記されている。「立派」な都市をつくるべくパリを大改造したのが19世紀後半、20年近くもセーヌ県知事を勤めたオスマンであった。もちろん彼にそれだけの大事業が可能だったのはナポレオン3世の支持があったからである。皮肉なことにこの「立派」な都市は美しい都市にしようという意図よりも、見通しのいい都市に改造することにより市民の反乱を防ぐためだった、という説が様々な書物で主張されてき

た。しかしナポレオン3世やオスマンの意図がどのようなものであったにせよ、結果的にパリが中世の名残を色濃く残す都市から近代的な都市へと面目を一新したのも事実だった。ブールバールと呼ばれる幅広い通りが登場するのもこの大改造の結果である。サン・ミシェル、セバストポール、サン・ジェルマンなどがこうして現在の姿に改められた。グラン・ブールバールというのはオペラ座近くのキャプシーヌ大通り、イタリア大通り、モンマルトル大通りなどの総称である。

ここには多くの一流の店が軒を連ねている点でパリの銀座ととってもいい大通りだった。ただしそれは銀座より50倍も立派だったのである。

言葉の通じない初めての異国で、他人の世話を受けなければ自由に動くことのできない不便を漱石は痛感していたに違いない。渡辺の後について歩くしかない自分をいささか不甲斐ないと感じていたように見受けられる。そこからまた仏蘭西語を勉強しておくのだったという後悔の念にさいなまれたのである。

また彼が痛感したのは貨幣の交換価値の相違に基づく金銭の速やかな減少である。金の力で言葉の通じない異国の中をкаろうじて動くしかない自分、しかし唯一の頼みの綱である金は羽が生えたようになっていく。

これまでよく無事に辿り着くことができたものだという安堵の思いと、つつがなくロンドンに行くことができるであろうかという不安とが交錯していた。しかしこれは初めての外国旅行であれば、今日でも人々が当然抱く不安であり、格別特殊な不安ではない。

さらにこれはロンドンに着いてからも変わらなかったが、彼は肉体的なコンプレックスに執拗に付きまとわれていた。白い人の中の黄色い肌を持った自分、洋服が身につかない自分に対する引け目。また彼は子供のころ天然痘を患い、痘痕を気に病んでいた。同類がたくさんいればそれほど肩身の狭い思いをしなくてもすむであろう。それなのにヨーロッパに来て注意深く観察しても痘痕のある人間など一人もいない。彼はこうした事実には深く傷つかずにはいられなかった。ここでは触れていないけれども、彼は黄色い皮膚の色、

痘痕の他、身長が低いことにも引け目を感じていた⁽³¹⁾。後に自己本位を唱えた漱石であるが、彼もまた西洋の基準で美醜を判定するほどに西洋を内面化し、西洋人の視線で自己を見詰めていたのである。

この1900年は寒波が早く訪れた。彼は外套を着て、手袋をはめて万博見物に出かけなければならなかった。服装に関して、他の留学生たちが現地であつらえるべく普段着で出かけたのに対し、漱石は東京で新調した服を着て留学した。彼は自分が着用している服が他の乗客に引けを取らないことを鏡子宛て書簡でわざわざ報告している。彼がお洒落で服装にこだわりを見せる人間であったことは多くの人が証言している通りであろう。ここでも乗客の服を観察し、太い柄柄や派手な色合いの服を着ている人は皆無なこと、くすんだ地味な無地や霜降りが多いこと、とりわけ外套は黒か紺に限られ、たまに鼠色が見られ、それ以外の色はないことまで事細かに報告している。

23日付の書簡はまた鏡子に対し入れ歯を入れることと、髪を丸髷に結わず洗い髪のままにするよう要求している。もっともこれが初めての要求だったわけではなく、9月27日付プロイセン号で書かれた書簡でもまったく同一の要求がなされている⁽³²⁾。頭髪が抜け落ちるといのは今でいう円形脱毛症だったのであろうか。鏡子は熊本時代自殺未遂を図っている。また実家では父親の社会的地位が内閣の交代に翻弄される不安定なものであったため、鏡子もそれを気に病んでいたという事実などを考えると、精神疾患に由来する「禿」であったかもしれない。またこの妻の「禿」は『吾輩は猫である』でも再度話題の一つとして取り上げられた。妻の歯並びの悪いこと、若いのに禿があること、この二つは妻の肉体のなかで彼にとって気がかりな欠陥だった。前者に対する対策が悪い歯を抜いて入れ歯にすること、後者に対しては丸髷に結うと髪が引っ張られて抜け落ちるから洗い髪のままにすることだったのである。

しかし同時に妊娠中の鏡子に対して感情を刺激するような小説を読んだりしないように注意することも忘れなかった。家族からの来信の少ないことに苛立ち、手紙を書くように依頼する言葉がしばしば見受けられるけれど、そ

れはロンドン生活開始後しばらくしてからのことである。

鏡子宛てに書簡をしたためた23日は午前中に樋口、午後には谷本という二人の人物と面会した。朝食、昼食ともいわゆる洋食だったのであろう。なぜなら夕食はわざわざ日本食を食べたことわっているからである。夕食後はMusic HouseとUnderground Hallに行った。「巴理ノ繁華と墮落ハ驚クベキモノナリ⁶⁹⁾」という言葉を残しているところから想像を逞しくすると、彼らは少々いかげわしい劇場に赴いたのであろう。これは2年間のロンドン滞在中も、多くの日本人駐在員や留学生のように地獄(売春婦)を買うことのなかった漱石にとっては珍しい体験だった。彼は朝の3時になってやっとノディエ夫人宅に戻った。あるいは彼は有名な「ムーラン・ルージュ」に仲間たちとカンカン踊り見物に繰り出したのであろうか。

「ムーラン・ルージュ」はその扇情的な踊りやロートレックの絵画であまりにも有名になり、我が国にも同じ名前を持つ劇団が作られたほどである。この小屋の設立は1889年であるから漱石たち留学生がパリを訪れるわずか10年前のことに過ぎなかった。そしてこのホールもまた89年の万博を目当てに開業されたのあり、その点エッフェル塔と双子の89年万博の遺産だった。しかしこのホールの「売り」はただ挑発的な踊りばかりではなかった。そこでは多くの白熱電球が使用されて、場内を昼をも欺くほど明るく照らし出し、カンカン踊りと相俟って人々を引き付けていたのである。

フランスにおける電気は1844年のアーク灯の点灯をもって嚆矢とするが、これはなかなか普及しなかった。その理由は点灯している時間が短かったことと、あまりにもまぶしすぎたからであると言われている。しかし19世紀末になると、石炭による火力発電所が建設され電気がそろそろ人々の暮らしに入りかけていた。「ムーラン・ルージュ」もまたこうした当時のハイテクをいち早く導入して人々の興味や関心を引きつけたのである。

万博ではないがフランスでは1881年(明治13年)8月10日から11月20日にかけて国際電気博覧会が開催された⁵⁹⁾。その間の入場者数は90万人、出品者数は176人だった。当然のことながらフランス人が最も多く全体の半数以

上を占め、ベルギー人、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人がそれに続いた。この時の目玉の一つは電車だった。コンコルド広場から会場の産業館までのおよそ500メートルの間を見学者を運んだ。この産業館の跡地に1900年の万博のため、グラン・パレとプチ・パレが建設された。電車以外では電話と電球がこの博覧会でもっとも強く人々の関心を引いた。言うまでもなく前者はグラハム・ベルの、後者はトーマス・エジソンの発明である。

パリの照明は18世紀半ばのレヴェルボール灯が19世紀に入るとガス灯に代わった。後者は19世紀末まで現役でありつづけた。電気による照明は1878年のアーク灯の設置に始まる。しかしこれは十分な普及を見る前にエジソンの発明による電球に取って代わられた。もっとも漱石がパリを訪れた1900年にはまだ一般家庭への電気の普及は極めて限られていた。電気はまだまだ公共の空間を照らす照明であり、一般家庭に普及するにはまだ時機尚早だったのである。「電気館」が1900年の万博の最大の呼び物の一つになった所以である。しかし公共の空間における電気の使用は漱石の想像を上回るものがあつたに違いない。彼が東京よりはるかに明るいパリの町に度肝を抜かれたとしても不思議ではなかった。銀座を数十倍立派にしたような、という表現の中には建物、道路が日本のそれに比べて格段に優れているということばかりでなく、町の照明が東京のそれとは比べ物にならないほど明るい、ということも含まれていたのではないだろうか。

大学入学以前の漱石が建築志望だったこと、「日本ではセント・ポールのような大建築は不可能だから、それよりも文学を専攻したほうがよい」という米山保三郎の忠告に従って専攻を文学に変更したことは広く知られている。これもまた漱石をめぐる数多い「神話」の一つであろう。それにしても彼が建築に一方ならぬ興味を持っていたことは否定する必要はないものと思われる。パリはもちろん彼にとって初めてのヨーロッパの都市ではなかった。彼はナポリ、ジェノバ、トリノなどという都市を経由してパリに到着したのであった。小さな地方都市ではあっても貧弱な建造物の立ち並ぶ日本の都会と比較すればはるかに重量感に溢れた堂々たる都会に見えたに違いない。し

かしパリはこれらとは比較を絶した大都市である。彼の受けた衝撃は決して小さなものではなかった。それと同時にパリの「繁華ト墮落」は彼を反発させると同時に強く引き付けたに違いない。出発前からフランス語を学んでおかなかったことを悔やんでいた彼であったが、英国到着後も日本に残る友人、同僚の助けを借りて英国留学終了後、フランスでの留學生活の継続を望んだことから、彼のフランスに対する傾斜が認められる。

10月24日は12時半から安達を訪ね、昼食を共にした。6時頃帰宅して就寝の記述がある。長期の船旅、欧州上陸以降の慌ただしい毎日をもたらした疲労回復に充てられたような1日だった。

25日は渡辺宅に赴き、再び博覧会を見物した。美術館にも出かけたのだが、具体的な名前は挙げられていない。「宏大ニテ覽尽サレズ日本ノハ尤モマヅシ³⁶」という言葉がこの日の日記の締め括りであるが、これは博覧会と美術館の双方にかかる言葉であろうか。そうすると、この美術館は例えばルーブルなどではなく、博覧会の一環として博覧会場に設置された美術展だったように思われる。とすればこれはグラン・パレである。博覧会当時プチ・パレでは過去のフランス美術が、グラン・パレでは各国の美術作品が展示されていたからである。

26日は午前中、浅井忠を訪問した。その後は芳賀、藤代と散歩した。パリ滞在中の日記には天候に関する記述はこの日の「雨ヲ衝テ還ル³⁷」ただ1カ所だけである。ということは他の日は晴天であるか、曇りのいずれかであって、少なくとも雨は降らなかったと考えてもいいのではないだろうか。ノディエ夫人宅に帰ると樋口という人物が訪ねてきた。

27日は三度目の博覧会见物に出かけた。「日本ノ陶器西陣織尤モ異彩ヲ放ツ³⁸」の記述があるだけである。漱石がこの日訪れたのは当時装飾美術が展示されていたアンヴァリッドだったと思われる。

こうして彼の1週間のパリ滞在は終わりを告げた。後は目的地ロンドンを目指すだけである。パリ滞在中の彼の足跡を完全に辿ることは、彼自身の日記や書簡、同行者の証言共に極めて限られていて、しかも今後もそれほど多

くの資料の発見は期待薄である以上、推測の域を出ない部分も多いのであるが、現在判明している部分だけで判断するならば、彼は1週間の滞在中にいわゆる歴史的名所というべき場所にはほとんど足を踏み入れていないことが直ちに判明する。もちろん彼はここでは単独の行動者ではなく、常に渡辺に引率され、芳賀、藤代らと共に行動していたので、こうした訪問先も漱石個人の希望した場所ではなく、渡辺あるいは芳賀、藤代の後について歩いただけであったかもしれない。しかし博覧会を3回も見物したのは漱石自身積極的に賛成ではなかったにせよ、特に反対する理由もなかったからではないかと思われる。見物するものに事欠かないパリに1週間滞在しながら名所見物ではなく、博覧会にこれだけ魅せられたのは、一面では彼自身あまり名所旧跡に興味を示さない種類の間人であったからに違いない。ロンドン滞在中もあまり名所見物に励んだ形跡がないことからそのような断定して差し支えないものと思われる。さらに彼が科学にたいして並々ならぬ興味や関心を寄せていたことは、例えば寺田寅彦の証言などから明らかである。彼は新しい技術の達成を間近に見て興奮を禁じ得なかったに違いない。

28日の朝、彼はドイツへ旅立つ友人たちと別れ、最終目的地ロンドンを目指すべくサン・ラザール駅から列車に乗り込んだ。この駅は1837年にパリとサン・ジェルマンの間に鉄道が開通した際建設され、次々に拡張されていった。同日夕刻彼は無事ロンドンに到着した。2年間の留学が始まろうとしていた。

〔註〕

- (1) 出口保夫『ロンドンの夏目漱石』河出書房新社、1991年5月、p.9.
- (2) 夏目漱石『文学論』（『漱石全集』第14巻）p.12-13.
- (3) 夏目漱石『道草』岩波文庫、p.7.
- (4) 夏目漱石『漱石全集』第22巻（1996年3月）、「書簡 上」岩波書店、p.183. 以下、漱石書簡の引用は本書による。
- (5) 『値段史年表』（週刊朝日編）昭和63年。それぞれ、p.51、p.72、p.92、p.91.
- (6) 夏目漱石『漱石全集』「書簡 上」、p.188.
- (7) 前掲書、p.189.

- (8) 前掲書, p.190.
- (9) 夏目漱石『漱石全集』(第19巻), 1995年11月, 岩波書店, p.22.
- (10) 前掲書, p.23.
- (11) 『漱石全集』第22巻, p.194.
- (12) 『漱石全集』第19巻, p.24.
- (13) 前掲書, p.24.
- (14) 前掲書, p.24.
- (15) 小倉孝誠『19世紀フランス夢と創造』人文書院, 1995年2月, p.161-163.
- (16) 『漱石全集』第19巻, p.24-25.
- (17) 前掲書, p.25.
- (18) 前掲書, p.25.
- (19) 江藤淳『漱石とその時代 第二部』新潮社, 1970年, p.49.
- (20) 『漱石全集』第22巻, p.195.
- (21) 前掲書, p.222.
- (22) 前掲書, p.238.
- (23) 前掲書, p.239.
- (24) 前掲書, p.194.
- (25) 『漱石全集』第19巻, p.25.
- (26) 『漱石全集』第22巻, p.195.
- (27) Dominique Lejeune, *La France de la Belle Epoque 1896-1914*, Armand Colin, p.8.
- (28) 鹿島茂『パリ・世紀末パノラマ館』角川春樹事務所, 1996年4月, p.12.
- (29) 『漱石全集』第22巻, p.195.
- (30) 『漱石全集』第19巻, p.25.
- (31) 『漱石全集』第22巻, p.195.
- (32) 前掲書, p.196.
- (33) 前掲書, p.196およびp.191.
- (34) 『漱石全集』第19巻, p.25.
- (35) 国際電気博覧会については, 小倉氏の前掲書, p.112-117を参照.
- (36) 『漱石全集』第19巻, p.26.
- (37) 前掲書, p.26.
- (38) 前掲書, p.26.